

# 巻 頭 言

取 締 役  
阪神製造所長  
知多製造所長

秋 月 英 美



日本のステンレス生産は、量において1970年に米国を抜いて以来、質、量ともに世界のトップの地位を固めてきた。熱間圧延鋼材ベースの生産量は1991年に年間283万トンを記録した。高生産の背景となるステンレス鋼の需要拡大の理由として、社会の高度化にステンレス鋼の優れた性能が適合したという基本的事実に加えて、ステンレス製造工程における新技術開発により、コストダウンと品質改善を達成したこと、およびお客さまの協力を得てニーズに合った新製品を開発し続けたことがあげられる。

ひるがえってみるに、当社は、ステンレス鋼板製造技術の抜本的強化を目指して1981年に製鋼部門、1982年に熱延鋼板焼純酸洗設備を千葉製鉄所に移管し、一貫製鉄所における熱延鋼板の製造体制を構築した。ついで、1991年に冷延ステンレス鋼板製造設備を稼働させ、普通鋼設備を共用しつつ冷延ステンレス製品を造る一貫製造体制を完成した。ここに千葉製鉄所、阪神製造所それぞれの特徴を活かした冷延ステンレス製造体制が整い、高品質のステンレスを高効率に生産することが可能となった。

一方、製造設備の改善とともに新製品の開発と積極的な用途開発により新規需要の拡大をはかってきた。例をあげれば、建築材料関係では意匠性を志向して「ルミナカラー（発色ステンレス）」「ファンシーコートカラー（透明着色塗装ステンレス）」及び関西新空港ターミナルビルの屋根にも使用されている「高耐食ガル仕上げ材」を開発した。自動車排ガス用材料では、エキゾーストマニホールド、マフラー、エキゾーストパイプのそれぞれに適したフェライト系ステンレス鋼を品揃えするとともに、セラミックに代わる触媒コンバーター用ハニカム材料として、「R20-5SR（20Cr-5Al鋼）」の50ミクロン箔を実用化した。さらに家電、厨房、産業機械、車輛の各需要分野においても、ニーズに適合した製品開発を適時行ってきた。

人類の最大の関心事である地球環境保全への貢献をはじめ、今後ステンレス鋼の果たす役割はさらに重要性を増すと予想される。これに応えるべく新製品開発に一層注力するとともに、千葉製鉄所に建設中の新製鋼、新熱延を活用して製造プロセスの格段の飛躍を図っていきたい。

本誌は1985年（Vol.17 No.3）に続くステンレス鋼特集号であり、この間のプロセスと製品に関わる研究開発の成果の一端をとりまとめたものである。関係各位の御参考になれば幸である。